＜研究ノート＞

トリーアのユダヤ人記念碑

河村　克俊

はじめに

歴史について学ぶことの目的は、過去に何が起こったのかを知ることだけでなく、そのことを通じて現在を振り返り、それが起こってはいけないようなことであったならば、再びそれが起こらないよう考えると共に行動することであるだろう。この点については私たちが共通に理解するところである。しかし、実際にはこの目的を成就することはかなり困難であり、ほんとうのところこれを実行することは私たちの能力を超えることであるのかもしれない。良識ある批評家が繰り返し強調するように、私たちは歴史から学ぶことがこれまで一度もできなかったし、恐らくこれからもまたできないのだろう（戦争は決してなくならない）。そうだとすると、私たちに何が残されているのだろうか。

起こったことを記憶すること、想起することは、私たちにもできるのではないか。前世紀にあった「国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス）」によるユダヤ人等に対する迫害と殺害については、20世紀に人類が経験した蛮行の一つとして私たち日本人にもよく知られている。ドイツではこれを忘却しないための催しが現在も続けられている。これは歴史について学ぼうとする無数の試みの一つである。この試みもまた本来の目的を達成することなく終わるのかも知れない。しかし、現在それは試みられており、そこで人々が共に歴史から学ぼうと力を尽くしている。ドイツで最も古い町の一つで行われているこのような試みに触れる機会があったので、ここで簡潔に紹介することにしたい。

1.「迫害の行われた夜」への追憶

「トリーア市庁舎新聞」2018年11月6日（火曜日）4頁[1]に、以下のような記事が掲載された。「2018年11月9日、ユダヤ人への迫害を想起する日。『迫害の行われた夜』[2]から80年を思い起こす日の行事と、クルムホーフ絶滅収容所の展示。　―アウシュヴィッツ、ブーヘンバルト、ダッハウ―　第二次世界大戦時の大きな収容所の名前は、今なお苦痛に満ちた記憶に結びついている。ナチスの運営していたこれら以外の収容所はしかし、あまり知られていない。そのうちの一つでおよそ140名のトリーア市民が殺害されていた。クルムホーフ絶滅収容所は、当時ドイツ軍が占領していたポーランドの町ポーゼンから東へ約130キロのところに位置する。その町の市立図書館のロビーで『社団法人 活動グループ平和 Arbeitsgemeinschaft Frieden（AGF）e.V.』の主導のもとに、1938年11月9日の『迫害の行われた夜』から80年が経過したことを想起するための一連の催しの一つとして展示会が催されている。教育・メディアセンターのルドルフ・フリー

1　*Rathaus-Zeitung (Trier)* Dienstag, 6. November 2018, Seite 4.
2　原語は、Pogromnacht。ポグロム Pogrom は、特定の集団に対する政治的な迫害を意味する。

ス所長は、主催者としてその主要な目的について、『私たちは殺害された人々の体面を回復したい』と述べている。トリーア大学の卒業論文でクルムホーフ収容所について取り上げたベンヤミン・ケルファーは、開会に際してこの収容所の歴史について報告を行った。財団『殺害されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑』[3] による二週間にわたる展示会が、モニカ・メッツラー（AGF）とルドルフ・フリースによって企画・運営され、プロテスタント学生協会とカトリックの大学協会がこれに協賛している」。

11 月 9 日金曜日、ある哲学の演習科目の開始時に、学生の一人が当日トリーア市内で行われる催しについてアナウンスし、参加を呼びかけた。

〈現在のシナゴーグ〉

その呼びかけによれば、午後 4 時から町の中心部で反ユダヤ主義に、またレイシズムに反対することを目的とするデモを行い（主催：AGF、ユダヤ文化協会）[4]、その後 5 時に旧シナゴーグ跡地ツッカーベルク通りで献花、祈祷を行い（主催：トリーア市とユダヤ文化協会）、5 時半には市による記念式典があり（主催：トリーア市）、7 時にカイザー通りのシナゴーグで安息日の祈祷を行う（主催：ユダヤ文化協会）ということだった。夕方 6 時に旧知の法律家ライナー・E. 氏と落ち合い、一緒に最後の催しであるシナゴーグでの安息日の祈祷に参加した。決して広いとはいえない室内の座席はすべて埋まり、入り口のある最後部には補助椅子に座る人たちがいる。そこにはおよそ 70 名ほどいたのではないか。一人のラビの指導のもとにヘブライ語のテクストが抑揚をつけつつ参加者によって読まれた。祭壇の上にはヘブライ語の文書が立てられている。E. 氏によればこれは「モーセの十戒」とのこと。2000 年以上にわたって人々の生活や行為の規範となり続けている教えである。特に後半のテーゼ、「殺してはいけない」、「盗んではいけない」、「偽証してはいけない」等についてはユダヤ教徒だけでなく、一般の人々にとっても生活を律する法であり、ヨーロッパの伝統のうちに生成する普遍的道徳法則の原型となるものに他ならない[5]。座席前のポケットにあった

3　Stiftung “Denkmal für die ermordeten Juden Europas”. この名称から考えると、恐らくこの財団は殺害されたユダヤ人のために各地に記念碑を設置することを目的としている。

4　AGF のホームページによれば、このデモには 360 名以上が参加している。

5　批判期の最初の倫理学書でカントは、「嘘をついてはいけない Du sollst nicht lügen」という「命令 Gebot」について、これをあらゆる人に妥当する高い一般性をもつ道徳法則の一つに数えている。“Gebot” には「(宗教的) 律法」という意味もある。カントはここで『旧約聖書』にみられる「律法」を念頭に置いていたのかも知れない。以下を参照。Immanuel Kant, *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten,* Riga 1785, Neudruck: Hamburg 1965, S. 5. またカント固有の道徳法則は、この命令や「盗んではいけない」など個別的な道徳法則ないし道徳命題を自らのうちに包摂する命令として定式化されたものに他ならない。それは例えば次のように定式化されている。「君の人格の内なる人間性を、またどの他者の人格の内にもある人間性を、常に同時に目的として扱い、決して単なる手段として扱わないように行為しなさい」（ibid., S. 52）。他者に対して嘘をつくことは、その人を自分の利益ないし意図のための手段として扱うことになり、その人を自分と同様に目的をもった存在者として扱っておらず、また目的それ自体として扱っていないことになるので、この命令によって禁止されることになる。これは「定言命法」の一つであり、目的の方式と呼ばれる。カントによ

テクストはヘブライ語とのことで読めない。また歌唱のような講読についても意味を把握することはまったくできなかった。いずれにしても、国が滅亡した後、離散した人々によって2000年にわたって継承された信仰が、ドイツの地方都市でも未だに生きていることに直に触れる貴重な機会となった。

2. トリーアの町[6]

ここでトリーアについて簡潔に紹介しておきたい。この町は南西ドイツに位置するラインラント・プファルツ州にあり、人口は現在約11万人。手元の案内書によれば、町の歴史は紀元前数世紀のケルト人集落にまで遡る。その後、ローマ人がこの地を征服し、彼らが移り住むようになった。「アウグストゥスの町トリーア」という名称が用いられていたという記録があり、この名の皇帝の時代にローマ人の町として隆盛したと考えられる。旧市街にはローマ時代の大浴場跡[7]、ポルタ・ニグラと名付けられた町の門、巨大な建造物バシリカ[8]、またモーゼル川に架けられたローマ橋、町の郊外には円形劇場跡などが残っており、近隣諸国からも常時多数の観光客が訪れている。町の中心にある大聖堂教会には、キリストが磔刑となるときに着ていたと伝承される「聖衣 Der heilige Rock」が安置されており、数十年に一度これが公開される折には巡礼の人々で町があふれるといわれている[9]。「黒い門」を意味するポルタ・ニグラは、町の四方にあった市門のうち北面に位置し、中世以降18世紀末まで教会として用いられていた。また、いわゆる神聖ローマ帝国の皇帝を選定する資格をもつ選帝侯 Kurführst の一人がトリーアの大司教であったこともあり、町中には多数の教会があり、現在もその大半がカトリックの教会として使用されている。学術関連では、1473年に大学が設立されており、1798年に革命後のフランス軍がこの地を占領した際に閉鎖となるまで運営されていた。現在も旧市街の一画に古い大学の建物の一部が残っており、1970年に新たに大学が設置されると、神学部の授業や一般の講演会、教会音楽の演奏会などに使用されるようになった。現在学生数は1万人を超えている。このような古い町であることもあり、かなり古い時代からユダヤ系の人々がこの町には住んでいたようである。

れば、この命令は人間を超えた存在者から与えられるものではなく、私たち自身の理性が与えるものである。この命令を道徳法則と考えるならば、この法則は理性が自ら立法する法則であることになる。換言すれば、これは理性の自己立法であり、「自律」(ibid. S. 56) である。ただし「自律」については、単に立法することだけでなく、それが法則であるがゆえにそれにしたがうことで、はじめて成立すると一般に解釈されている。この解釈によるならば、先の定言命法を表象ないし自覚するだけでなく、これにしたがって行為することではじめて「自律」が成立することになる。なすべきことが分かっていてもこれを行うことができない（歴史から学んだことを実行することができない）ということのうちに、自律を遂行することの容易でないことが現われている。

6 記述にあたっては、以下の文献を参考にしている。Stefan Heinz, Andreas Tacke, Andreas Weiner: *Trier 1512 – Heiliger Rock 2012, Imhof-Kulturgeschichte,* Petersberg 2011, 2. Auflage 2012; Joscha Remus, City/Trip Trier, Trier 2017;Rolf Lorig, Ingrid Fusenig, Chrsine Cüppers, *Triers schönsten Seiten,* Medien-Verlag Schubert, 2014.

7 これは、コンスタンチヌス一世 Constantinus I; Flavius Claudius（272年生～337年没、在位324年～337年）が建造したものとされている。彼ならびにその母ヘレナ（Helena 248年頃生～328年頃没）にまつわる遺物が市の内外で見つかっている。

8 これもまたコンスタンチヌス一世の命により、4世紀初めに宮殿として建造されたものとされる。

9 この「聖衣」は1512年にトリーアで帝国議会 Reichstag が開催された折に、マクシミリアン皇帝の希望で一部の人々に公開されている。また直近では、その500年にあたる2012年に公開された。以下を参照。S. Heinz, A. Tacke, A. Weiner: *Trier 1512 – Heiliger Rock 2012,* ibid., S. 61f.

〈ユダヤ人横町〉

町の中心にあるマルクト広場のすぐ近くに「ユダヤ人横町 Judengasse」という地名が残っている。この横町への入り口にみられる説明によれば、この入り口にあたる門（現在は撤去されている）は中世以来あったユダヤ人街へ入るためのものであり、1219 年頃に建設され、1607 年から翌年にかけて改築されている。この記述から、遅くとも中世以降町中にユダヤ人街のあったことがわかる。また、ちょうど 2018 年に生誕 200 年の記念行事が催されたカール・マルクスの生家が町中に記念館として残っており、見学することができる[10]。第二次大戦後世紀の 80 年代まではフランス軍が数万人駐留していたが、90 年の統一以降暫時減少し、その後完全に撤退した。町の郊外に煙草工場があり、またワインの醸造所が複数あるが、それ以外に特に産業はなく、観光が主な収入源であり、特にマルクスの生家の見学を目的とする中国や旧社会主義圏諸国からの観光客が今世紀に入り増加し続けている。そして、この町に居住していたおよそ 140 名の人々が、ナチス政権の時代に犠牲となったわけである。

3.「躓きの石」

「迫害の行われた夜」とは、1938 年 11 月 9 日、ドイツのあらゆる地域でナチスが組織的にユダヤ人の経営する商店や家屋、彼らの集会場であるシナゴーグを一斉に破壊した日のことである。この事件は砕け散ったガラスの破片を水晶にたとえることから一般に「水晶の夜」と呼ばれている。そして、この日を忘却することのないようこの町でも犠牲者を偲ぶ催しが行われたわけだ。手元の冊子によれば、先に触れたこの催しの主催団体の一つである「活動グループ平和（AGF）」[11] は超宗派的で、政党から独立した、公益に奉仕する団体であり、平和、正義、そして人権のために尽くすことを目的として活動している。また現在 260 名の会員がおり、その活動は、「国家社会主義 (ナチス) 時代のトリーア」、「困窮する人々の保護」、「一つの世界」といったテーマを包摂する。そして、「平和と環境センター Friedens- & Umweltzentrum」に事務室や会議室をもち、そこで定期的に平和、環境、政治等に関する催しを行っている。過去を忘却しないための企画である町の回覧・見学以外に、この団体は「平和政策のための講演」、「戦争と軍に代わる選択肢」などのテーマに取り組んでおり、運営資金については、会員が支払う会費、寄付金、プロジェクトの補助

10 マルクスはユダヤ人の家庭に育っている。

11 この団体の出版物に次のものがある。トーマス・ツッヒエ編『総統に代えて。国家社会主義（ナチス）時代のトリーア』Thomas Zuche（Hrsg.）*StattFührer. Trier im Nationalsoziaismus,* 3. überarbeitete und erweiterte Auflage, Trier 2005. “StattFührer” は、「総統」すなわちヒトラーは要らない、というほどの意味だろう。また、「町の案内書 Satdtführer」と発音がほぼ同じなので、市内にある迫害とレジスタンスの跡地を訪ねるという AGF の目的が想起されることを意図するものでもあると思われる。編者は第 3 版の序言で、この書の意図について次のように述べている。「私たちは、国家社会主義時代のトリーアで犠牲となった人々ならびに犯罪者たちを想起することで、現在みられる人権侵害や国民的妄想に対して人々の感覚がより鋭敏になることを願っている…」（ibid., S. 7）。

12 会員には定期的に機関紙「平和通信 Friedenspost」が配布される。

金等によって調達されている[12]。ホームページをみると、難民を支援する活動も行っており、政治難民としてこの国にやってきた様々な履歴をもつ人々が共に語り合うことのできる機会を提供したり、語学や生活一般に関するサポートなども行っているようだ。また、今回の企画を主導したAGFの下部組織である研究チーム「国家社会主義時代のトリーア」の行う研究活動の趣旨については、次のように述べられている。「私たちはトリーアのうちなる迫害とレジスタンスの跡地を探求している。そのことによってトリーアにおける当時の歴史を可視化し、迫害され犠牲となった人々と蛮行の行われた場所を紹介することを活動の目的とする」。トリーア市内の幾つかの箇所が回覧と見学の対象となっており、毎年1月27日（国家社会主義（ナチス）の犠牲者を想起する日）、5月8日（解放の日）[13]、11月9日（水晶の夜）には、組織的な回覧・見学が行われる。

このグループの企画する町の回覧については、次のようにも記されている。「私たちは、国家社会主義による犠牲者の住居跡に置かれた『躓きの石 Stolperstein』[14]を回覧・見学する。そしてかつてそこに住んだ人々への記憶を蘇らせる。『躓きの石』は［…］真鍮でできたカバープレートの敷石であり、歩道にはめ込まれている。真鍮のプレートのうえに犠牲となった人の名前と生年、強制収容所への移送、そして多くは死亡ないし殺害のデータが刻まれている。私たちは彼らの個人史について語り、その面目を回復することを試みる。犠牲になったのはユダヤ人、シンチ、社会的に除外された人々、ホモセクシュアルの人々、ナチスの政治的敵対者、安楽死犠牲者[15]、そしてナチスの活動を妨害したカトリックの聖職者たち[16]である」。

〈躓きの石〉

このリストに「ロマ Roma」の人々を加えると、一般に戦後の西ドイツ以来、ドイツが犠牲者として謝罪の対象とした人々が揃うことになる。同団体の別の資料には「トリーアからアウシュヴィッツへ　―シンチとロマへの迫害」という表題がみられるので、「ロマ」ないしジプシーと呼ばれる人々もまたこの地に居住していたことがわかる。

おわりに

過去に一度起こったことは、また繰り返し起こるといわれる。恐らくその通りなのだろう。そうなるよう決まっているのかもしれない。しかし、それでも何がしかそのことに抵抗する手段があり、またそれが可能であるならば、これを行うことが私たちに課されているのではないだろうか。過去に起こったことを忘却しないために繰り返しそのことを想起するための活動を行うこと、これは私たちに可能な過去の忘却に抗うための手段である。これもまた結局は目的を成就することなく終わるのかも知れない。しかしこのような活動を繰り返すことが私たちには課されているように思われる。

13　5月8日は、第二次世界大戦においてドイツが（1945年に）無条件降伏を受諾した日である。
14　これは、トリーアだけでなくドイツの広範な地域に置かれている。
15　ここで意味されているのは、労働に携わることのできなかった人々や障害をもった人々である。
16　このようなリストに「カトリックの聖職者」が加えられることは比較的珍しい気がする。手元のデータによれば、1985年5月8日に当時の西ドイツ大統領ヴァイツゼッカー（Richard Karl Weizsäcker）が行った演説でも、「カトリックの聖職者」には言及がなかった。恐らくトリーアの町で起こった何らかの事件にちなむものだろう。